

## 火が拓く原野——野から山へ、山から野へ

朽木 FS 特任研究員 今北 哲也

### はじめに

忘れられない光景が浮かぶ。  
あねさんかぶりの数人の女たちがあぜみちを歩いている。  
背に負うミズ<sup>1</sup>を沈みはじめた夕陽が照らしている。  
長い影は連なりながら下在所へ向かっている。  
ミズを膨らましたのはゼンマイにちがいない。  
畠から上在所へもどる私はおもわず立ち止っていた。  
針畑のむらで暮らしはじめた頃である。

今、80歳代に入った先輩達が予想もしなかった山野の姿に出会っている。

あちこちに広がっていた田んぼの肥草専用の草山は草刈り慣行が止んで50年、村人達が嫌ったコナラの木山に様変わりした。遠目には緑いっぱいの好ましい姿に見える。近山の元草山に近づいてみる。草木はパラパラで殺風景だ。遠くまで見通しが効く。林に踏み入る。落ち葉は薄い。山肌がむき出しだったりする。鹿に下草を食べ尽くされた跡だ。マツの立ち枯れや倒木も見える。太いコナラが株を尾根に向け根こそぎ倒れている。1株や2株ではない。隣の木立ちに寄り掛かっている掛り木も目立つ。ひと風吹けば倒れるかもしれない。ヘルメット無しでは不安だ。

鹿の食害に遭った林床、追い打ちを掛けるようにナラ枯れが襲った。異様で惨憺たる光景である(写真1)。

秋の奥山に遊んだ折、ふた抱えもありそうなでかいミズナラが根返っていた。株元周りは天然のマイタケだらけであった。寿命が来た老木に付く菌類。大昔から繰り返される森の自然な営みにすぎない。

この光景からみれば、ナラ枯れや鹿にやられた裸の林床は人間のわざに見える。履歴を辿ればかつて草刈り山の時代に、そこにあったはずのゼンマイ、ヤマフキ、ワサビ、ワラビ、ヤマザンショウ等など今は容易には手に入らない。雪下の三月(みつき)を潤し、飢饉の冬を凌ぎ、むらの命をつないできた大事な保存食の材料であった。

ゼンマイ採りを終えた暮れなずむ在所の光景。対照的に、目を疑うコナラの林。これら



写真1 鹿の食害にやられ、林床がむきだしになった山(撮影:黒田末壽)

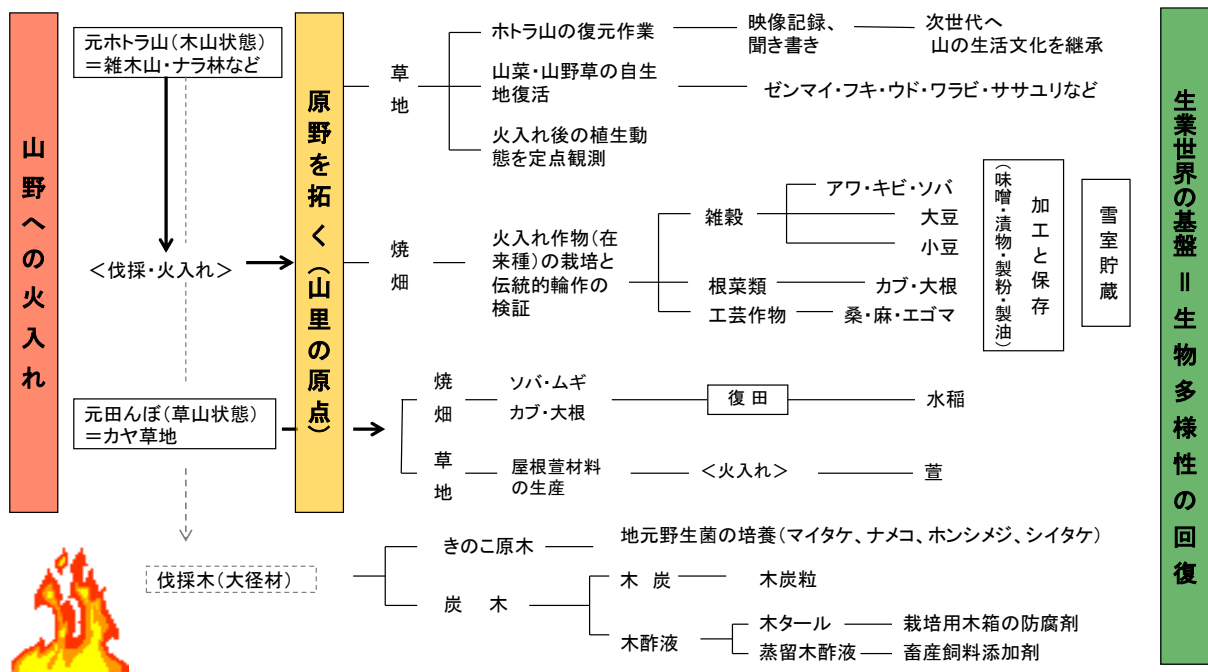
<sup>1</sup> 藁を縛って細縄を作り、袋状に編んだもの。ゼンマイやヤマフキなど山のものを採集、運搬するのに使われた。

は私にとって「くらしの森」を構想するきっかけの一つとなった。

## 1. 「くらしの森」づくり構想

朽木フィールドステーション（朽木 FS）では、滋賀県湖西・湖北地方の山里で「くらしの森の再生」を課題に掲げ 2008 年より 4 年間、実践型地域研究に取り組んできた。ここではまず、朽木 FS が掲げた「くらしの森」づくり構想について、火のエネルギーに絞って報告したい。構想は、図 1 のようにまとめられる。

### 「くらしの森」火のエネルギー <近山=里山城>



注) ホトラ山: 1950年代まで湖西一帯ではホトラヤマと呼ばれる肥草山を管理し、田を養う元手としてきた。ホトラ(春の山焼きあとに、伸びてきたコナラの萌芽枝などの柴草)を夏に刈りとり、牛の敷草とし、熟成させて春田に鋤きこんだ。山と牛と田の循環型農業。(今北原 2007)

図 1 「くらしの森」火のエネルギーと生業世界への展開<近山=里山城>

私たちが取り組もうとする現代の山野は、かつての「くらしの森」と様が変わりしている。たとえば、ホトラヤマのような、広範囲に広がっていた草地や原野はほとんど見られなくなった。そのような開放地は、火入れ慣行が止み、かつて村の人たちが嫌った木山状態になった。炭焼き産業もすたれ、自家用の薪さえもガスや石油にとってかわられた。山に人が入ることも少なくなり、太るに任せられた広葉樹は、炭やキノコ原木に利用するにしろ、大きな労力を要するようになった。

古来から火を手立てに山とつきあってきた先人の知恵を思い起こし、再び、火を入れることで現代の「くらしの森」を取り戻す構想を立てた。火の力でまず、原野を拓くことから出発する。伝統的に火を使った山とつきあいには、二つの形がある。一つがホトラヤマや牧野などの草地である。開放地が現れることで、ゼンマイ、フキ、ワラビ、ウド等、枚挙に暇がないほど山菜が復活する。もう一つの形が焼畑である。火入れとセットになって伝承されてきた在来作物は、地域の固有種として遺伝子資源の保存に留まらず、文化を守り育て、伝えていく上で重要である。在来作物は、雑穀や根菜類に

とどまらず、桑、麻、エゴマ、楮、桐など多岐にわたる。このように、草地や焼畑など、火を通じて山野が生み出す恵みは、山の村の生業基盤となる。ホトラヤマの場合は、2年毎に火が入れられる。焼畑の場合は20～30年に一度火が入れられる。これにより、多様な貌の山が現れる。これは、生物多様性の回復にもつながる。

## 2. 野焼き・山焼きの実践

以上のような構想の下、火野山ひろばあるいは朽木FSが火入れの段取りに至った箇所は、2005年から2011年の6年間で、延べ16箇所（計6集落）である（表1）。

火入れ地の特徴で分けると、(a)数年以上の遊休農地で平坦なカヤ草地（鎌掛や椋川）、(b)林道残土処分やスキー場造成後のカヤ草地や原野（椋川や中之郷）、(c)地山の岩までが浅いとか、よく雪崩れるとか、何らかの理由で木山に遷移せず、低木、笹、蔓などが優占する山（中河内）、などである。いずれも木山に遷移しない原野であり、木山への火入れは実現しなかった。

火入れと植生回復という視点から、主な火入れ実践地での作物の生育をみってみる。

今津町椋川の遊休農地（元田んぼ）は、初年度は虫害もほとんど見られず、村の人を驚かせたくらいであった（2006年）。2年目には虫害に遭ったが、程度は大きくはなく木酢液で抑えられた。同一のカヤ原への火入れではあるが、播種範囲を選ぶなど連作回避の工夫を試みた。しかし、4年連続に及んだ結果か、作物の生育が期待できないと予想され、5年目から火入れを止めている。

余呉町中之郷（スキー場）はカヤが優占し、ヨモギ、イタドリなど多種類の野草が生える野原である。過去3回（2009、2010、2011年）火を入れ、その都度おおよそ前年の火入れゾーンに重ならないよう配慮もした。初年度のような収穫には至っていない。連年火入れされたゾーンもあり、はっきりした火入れ地図が出来ているわけではないので判断が難しい。椋川の事例に照らせば、連年の火入れは、作物を播種して収穫するという焼畑的利用には耐えられないと考えられる。

木山ではなく、自然草地における焼畑の可能性が見いだせないとしたら、湖西のホトラヤマにみる草刈り慣行に習い、自然草地を資源と見直して一部のエリアを対象に、たとえば一つのゾーンでの隔年火入れによる良質な野草採取を目指すのも方法ではないかと考える。中ノ郷の草地も椋川のカヤダイラ復元実験地（島上章参照）と同じく、林道やダムサイトなど土木工事の残土であり、肥っけのない心土が表土になっていたり、山の岩石などが埋まっている。そのことも念頭において良い道をさぐる必要がある。

余呉町中河内では、2007と2008年には個人有の山、2010年と2011年は在所の共有山で火入れに取り組んだ。ここでは後者について考えてみたい。現場は密生するササ原であった（写真2）。和名はイブキザサだと教わった。ササ以外はタネウツギがポツポツと生える程度であった。2010年には、勢いよく焼けた。焼け跡のクサの再生も弱く、旱魃害を除けば芽立ちした蕪の生育は良好であった。2011年は前年の火入れ地の南隣に火を入れたが、雨で火入れのタイミ



写真2：ササが密生する現場を伐開する永井邦太郎氏（撮影：今北、2010年、中河内）



ングが遅れ、土が十分焼けなかった。近在一帯でコオロギが発生し、本葉展開の前に食害をうけ、ほぼ全滅した（鈴木章参照）。

表 1 「火野山ひろば」による山野の火入れの実践 2005～2011

	時期	集落名	所有形態	栽培作物	現況と作業内容・生育	協力団体
1	2005年9月	日野町・鎌掛	個人有	在来種・日野菜かぶ <sup>1)</sup>	・休耕田のカヤや草を刈り払う ・集落内の山から柴を搬入し、燃え草を補充して火入れ ・虫発生(木酢撒布)	鎌掛集落有志の方、NPOしゃくなげ学校
2	2006年8～9月	日野町・鎌掛(2箇所)	個人有	日野菜かぶ	・休耕田に密生したネザサを刈り払う(火入れ見送り)。別の休耕田数坪火入れ	鎌掛集落有志の方、NPOしゃくなげ学校
3	2006年8月	今津町・椋川	個人有	河内かぶ、そば、万木かぶ、青首大根、カザフ大根 <sup>2)</sup>	・休耕田のカヤを刈り払う。製材端材を燃え草に補充して火入れ	椋川集落有志の方
4	2007年4月	今津町・椋川	個人有	コナラ育苗、カヤ株移植(2008年からホトラヤマ復元作業)	・林道残土の造成斜面。乏しい植生。びわ湖のヨシを搬入して燃え草を補充。 <sup>3)</sup>	椋川集落有志の方
5	2007年8月	余呉町・中河内	個人有	在来種・山かぶら	・低木、葛、草類の原野斜面(雪崩れ地)を火入れ	永井邦太郎氏、中河内集落有志の方
6	2007年8月	朽木・生杉	個人有	あかくら蕪(予定)	・くつきの森(高島市立公園)からナラ枯れ枝條搬入、一部火入れ	地元→朽木支所通じ中止要請
7	2007年8月	今津町・椋川	個人有	万木かぶ、日野菜かぶ、青首、カザフ大根、そば	・初年度と同じ休耕田のカヤを刈り払う。虫害が発生。	椋川有志の方
8	2008年8月	余呉町・中河内	個人有	山かぶら	・前年と同じ原野斜面の隣に火入れ	永井氏・中河内集落有志の方
9	2008年8月	今津町・椋川	個人有	万木かぶ、青首大根、そば	・初年度と同じ休耕田のカヤ刈払い。面積三分の一に縮小	椋川有志の方
10	2009年7～8月	余呉町・菅並	共有林		・戦後の薪採取後の再生林を伐採 ・植生及び埋土種子調査実施 ・火入れは見送り	永井氏、菅並生産森林組合、(財)水資源機構
11	2009年8月	余呉町・中之郷	共有林	山かぶら、F1あかくら蕪、F1青首大根、山形在来種かぶ	・カヤが優占する草地を刈り払う ・草の種類は多い ・菅並生産森林組合有林の伐採枝条、中之郷の杉枝などで燃え草を補充し、火入れ	永井氏、ウッドィパル
12	2009年9月	今津町・椋川	個人有	山かぶら、あかくら蕪、大根、山形かぶ	・初年度と同じカヤ田の火入れ。 ・ヨシ、製材端材で燃え草を補充	椋川有志の方
13	2010年8月	余呉町・中之郷	共有林	山かぶら、青首大根	・カヤが優占する草地を刈り払う ・杉枝を搬入。 ・火入れ予定面積に比べて燃え草少ない	永井氏、中之郷、摺墨集落有志、食文化研究会、ウッドィパル
14	2010年8月	余呉町・中河内	共有林	山かぶら、万木かぶ、辛味大根	・クマササが密生、低木が点在する原野を刈り払う。火勢強。生育良	永井氏、摺墨、中河内の有志の方
15	2011年8月	余呉町・中之郷	共有林	山かぶら	・カヤが優先する草地を刈り払う	永井氏、中之郷、摺墨集落有志、食文化研究会、ウッドィパル
16	2011年8月	余呉町・中河内	共有林	山かぶら、万木かぶ、青首大根	・ウツギ低木が点在する原野を刈り払う。ササは僅か。 ・前年火入れ地の南隣	永井氏、摺墨、中河内の有志の方

注<sup>1)</sup> 日野菜かぶは湖東・蒲生野の鎌掛在来。

<sup>2)</sup> 河内かぶは越前在来。万木かぶは安曇川在来。椋川の自在坊には白蕪の在来種が伝承されてきたが途絶えた。

<sup>3)</sup> 1950年代頃まで続いた湖西一帯のホトラ山焼きをイメージしたTV映像(里山特集)のために火入れ

出典:(今北 2010)を加筆修正

朽木生杉と余呉町菅並では、地元から火入れを憂慮する声があがり、火入れには至らなかった。

その経験を踏まえ、朽木では、山野の火入れを平場の畝に活かす試みとして、ドラム缶を活用した焼土実験に取り組んだ（今北 2011a, 2011b）。私はかつて平場の畝で、前作に枝豆とスイートコーン、後作に大根と紅カブのローテーションで周年作りまわしをしていた。有機質の施肥で農薬をかけず、大豆もはさみこの地に合いそうな田畑輪換を工夫した。しかし紅カブを根こぶ病にやられるという痛い経験に遭って、稼ぎ頭の紅カブづくりを断念した。

実験のねらいは、ドラム缶を使って擬似焼畑の状況をつくり出し、根こぶ病に対する焼土効果を確認する実験である。ハウス内の土壌改善も視野に入れている（写真3）。

この装置は、地元や街の人らと畝や里で延焼の気遣いなく、火入れをたのしめる簡単な野焼き体験の道具としても提案したい。また、山野の火入れ実践における燃え草の量と地温、作物の生育の関係を把握するため、部分的な焼土実験装置としての活用も考えたい。



写真3: ドラム缶を利用した擬似焼畑装置の現場実験  
(撮影:今北)

### 3. 考察

#### 3.1 「くらしの森」の実践フィールドを求めて

朽木FSの取り組みは、「くらしの森」づくりを試みるための山林原野を確保することから始まった。

私たちの目指すくらしの森づくりの手本は伝統的な山と村人との付き合い世界である。具体的にはホトラヤマという草刈り慣行と焼畑慣行である。両者に共通しているのが火入れ行為である。二つの典型的な山野の利用形態は戦後間もなくまで湖西・湖北それぞれの山の村に存在してきた。これは、琵琶湖源流域のくらしの森づくりからみれば、意義深いことだと認識させられた。しかし、ホトラヤマの復元を最重要課題にしていた活動のスタート時点では、湖北の焼畑にはまだ出会えていなかった。

湖西でのプランは、ホトラヤマとして草刈り慣行履歴がはっきりしている山を候補として3か月余りにわたって交渉を重ねた。しかし交渉は成功しなかった。椋川でのカヤとコナラの植え込みによって新規にホトラヤマ的原野づくりへシフトし直すことにした。未だ火入れ経験も浅かった私たち朽木FSチームの力不足であった。

しかしその後の湖北での火入れ実践によって焼畑の現場でありながら、湖西の草刈り慣行を僅かながら実感を伴って想像する手がかりが与えられた。例えば余呉、中



写真4: 火入れ後、萌え出た柔らかい野草  
(撮影:今北、中之郷)

之郷でのスキー場草地の火入れである。火入れ跡にヨモギ、フキ、イタドリなど火入れ前からあった草が再び勢いよく繁茂し、しかも、柔らかい葉だった（写真4）。草の種類では、湖西でも草屋根材にしたススキに似た大事な草、カリヤスがみられた。林道の傍らにはエゴマがみえた。かつての人里の痕跡がうかがえる（野間直彦氏の観察）。朽木でホトラヤマの火入れ後に萌え出たと聞かされてきた春の草々の様子を彷彿とさせた。

今後の課題は、琵琶湖源流域のもう一つの伝統的暮らしの森のかたちである湖西の草刈り慣行の復元である。湖北での焼畑体験がその糧となると考えている。

### 3.2 原野への認識：野から山へ、山から野へ

実践を通じてしばしばやって来る問いがあった。そもそも山野への火入れとは何なのか。原野への認識をあらたにできたことが私にとっての成果である。「野焼き、山焼きの実践」で触れたように、余呉の現場では原野から木山に移行しない、しにくい山野があるということ意識させられた。「原野」世界に注目するようになった私にとって、原野と火について考え、刺激をもらうことが出来た。

広辞苑によると、原野とは「自然のままの野原。雑草・低木の生えている荒地」である。朽木をはじめ湖西地方の山野に展開されてきたホトラヤマ慣行にあっては、既に記しているように連年あるいは二年に一度火入れし、隔年サイクルで田んぼ用の肥草をとってきた。このときに現れている光景とはまさに「雑草・低木の生えている荒地」であり、「原野」ではないか。自然のままの野原とは、自然草地といわれるもので、人間の働きかけはみられない。朽木での聞き書きによると、ホトラヤマでは「ホソ（コナラ）、シデ、クリなんかの柴が生えとったなあ」という。「クリは渋が田によくないゆうて、きろた（良くないといって、嫌った）けど、嵩になるで一緒に刈ったけどな。そら、ホソがホトラで一番や、って喜んだんや」

柴の他にいろんな野草がでた。カヤ、ゼンマイ、ヨモギ、ワラビ、ウド、ギボウシ、ゴマナ、キイチゴ、ササユリ、クサボケ、等々挙げればきりが無い。冒頭にも触れたように、これらの草々は山の暮らしを様々な場面で支えていた。ホトラヤマ慣行そのものに注目するあまり、これらの草の世界が意味するところを私自身十分認識してきたとは言い難い。つまり、肥草山であるという位置付けによって、たとえば農業的な観点に偏り、実際に村人の暮らしのなかで、占めてきた肥草以外の大事さにあまり目を向けてこなかった。ホトラヤマの「原野」としての側面、つまり、火入れを止めれば、草山から木山へといつでも移るといふことの意味に気づいていなかった。

焼畑も原野という視点で見れば、4、5年で木山へ返してやる。そして20～30年後にまた火を入れる。その以降の過程で現れる原野。一つの地域に何か所も焼畑地がある。焼畑期間が4～5年サイクルであることから何か所もの原野が時間差で現れているという光景。先に触れたように、いろんな貌の山が見えている。雑草がはびこり、火入れ前の木山の切り株からの萌芽も勢いを増し、低木と雑草の世界に移行する。それが原野の状態である。そして木山に入っていく。焼畑を放棄しても原野の恵みが続く。忘れてならないのは、イノシシやカモシカ、鹿、ウサギ、ヤマドリなど村人にとっての獲物の存在である。原野は狩場としての役割を古くから担っていた。そういった恵みが朽木の、湖西のホトラヤマの村の人が喜んだように、あてにされてきたのではないか。

そういう空間こそが、今失われている。原野は、じっとしていない山野の動きの中で過渡的であるせいなのか、注目されず無価値のようにみられてきた。図1に描いた仮説的な思考、「原野をつくる＝山里の原点」は実践研究がスタートしたときの直観であったが、「火が拓く～野から山へ、山から野へ」と原野の復権を提唱し、その意識で今後も現場に取り組みたい。



### 3.3 現代の入会山という可能性

火入れを手立てにした「くらしの森づくり」は、街や村の参加者に眠っていた“共有感覚”を刺激し、近未来に“現代の入会山”を登場させるきっかけになると予感している。

湖西、湖北に限らず、残念なことに山あいの集落の人口構成は高齢者に偏ってきたのが実情である。これまでの実践研究活動を通して村の人たちとつきあわせてもらう中で私たち自身も気づかされ、実感してきた「山野の担い手」の問題を、現代の入会山という視点で実践に移す必要が出て来ている。

既に触れて来たように、図1で提案している「火のエネルギーを手立てにした生業世界の構築」とは山野の若返り事業である。樹齢を重ねていく一方の元草山の木山や元薪炭林などの広葉樹を伐採し開放地をつくる(写真5)。伐採し開放地をつくる作業過程で、幹材はいうに及ばず枝葉末節を現場で資源化し、現場の恵みを富に変える「くらしの森」の入会い圏を仕掛ける。そのような実践研究を来年度以降のテーマに掲げたい。



写真5: 元ホトラヤマの風景。左はスギ植林地になり、右はそのままコナラ林に遷移した(撮影:今北)

### おわりに

行く先々の地域で御世話になること自体が先ずは私たちおのおのに課せられた実践研究課題でもあった。また、構想に近づくための助走路であるとすれば、フィールドが増えていったことは自然なことであったともおもわれる。4年間の活動を振り返ることが出来たという私たちの「成果」を足場に、草地、原野、木山を動的に示すことが出来るような現場活動へとしぼっていきたい。

私たちのチームは、「くらしの森」づくりという構想について地域の人達の理解を得るためのメッセージを意識的に発信してきたわけではない。与えていただいた現場で、火入れという責任のともなう緊張感のなかで作業を重ねてきた。今後も実践を続けることで、「くらしの森」づくりの具体的なイメージを発信し、理解を得ていきたいと考えている。

### 謝辞

現場から学ぶ、という想いを共有しながら活動に取り組んできました。

湖西の高島市域では朽木・針畑、今津・椋川、湖北の長浜市域では余呉の中之郷、摺墨、中河内、とフィールドは五つに広がって来ました。「くらしの森」づくりの場を求めて、小さな旅をさせてもらったのだとおもっています。

井上四郎太夫さんをはじめ、椋川の方々、永井邦太郎さんをはじめ摺墨でお世話になっている方々、佐藤登士彦さんをはじめ中河内でお世話になっているみなさん、辻川作男さんをはじめ、ウッディパルのみなさんに、様々な場面で助けていただき、ご指導をいただきました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

- 今北哲也 2010 「これまでの火入れ、これからの火入れ」『ざいちのち』No. 22 : 2
- 今北哲也 2011a 「山野の火入れを平場に活かす:ハタケとネコブ (その1)」『ざいちのち』No. 27 : 3
- 今北哲也 2011b 「山野の火入れを平場に活かす:ハタケとネコブ (その2)」『ざいちのち』No. 30 : 3